

鍋島家の雛あそび



# 鍋島家の雛あそび



鍋島家に伝来した雛人形・雛道具は

侯爵鍋島家第十一代当主直大なおひろ、十二代直映なおあき、十三代直泰なおやす各夫人所用のものが中心となっています。

初節句の折に誂あづからえられたもの、代々受け継がれたもの、鍋島家に嫁した後に新調されたもの

御祝いの節に拝領あるいは献上されたものなど

いずれも由来が明らかで、大名家・侯爵家にふさわしい豪華さと品格を兼ね備えています。

明治から昭和にかけての鍋島家三代にわたるお雛さまは

各夫人の家格や婚姻の経緯といった要因を背景に

それぞれの時代を豊かに映しだしてくれそうです。

巻頭 鍋島家の雛人形	3
鍋島家の雛祭り	8
◆梅印 栄子さま	14
それぞれの時代を映して	47
◆玉印 禎子さま	48
“嫁いでいった”人形たち	60
◆花印 紀久子さま	64
御台人形について	89
◆雛人形いろいろ	90
深川製磁のミニチュア洋食器	101
所蔵品目録	102
徴古館について	110
謝辞 参考文献	112



## 鍋島家の雛人形

三十五万七千石の外様大名であった鍋島家には

江戸時代の雛人形はほとんど遺っておらず

鍋島家の家紋である杏葉紋入雛道具をはじめ、道具類はすべて失われています。

その中で、おそらくは数奇な運命を辿ったであろう

江戸時代の雛人形と御所人形をここに紹介します。



# 鍋島家の雛祭り

江戸時代も終わり、明治維新後に華族となった鍋島家は住まいを東京に移します。最後の佐賀藩主十一代直大は、英国への留学、駐伊特命全権公使としてのローマへの赴任などで、西洋の文化を十分に吸収して帰国します。鹿鳴館では華やかな社交を展開しますが、一方では当時の極端な欧米崇拜の風潮を憂えてもいます。直大は元老院議員、宮中顧問官、貴族院議員などを歴任、明治天皇の信任も厚く、また、各種団体の要職を務めました。

鍋島家には幕末から明治以降に撮影された写真が数多く遺されています。鍋島家の人々は早くから写真にも慣れ親しんでいました。それらは写真館の手になるほか、自ら撮影のスナップ写真も多数含まれ、思わず笑みを誘われたり、ご家族の実像に近づけたりと、当時の様子を知らる大変貴重なものです。これらの中に、鍋島家の雛祭りの様子を伝える写真も含まれていました。

鍋島家のお雛さまは、十二代直大夫人栄子、十二代直映夫人禎子、十三代直泰夫人紀久子の各夫人所用の品が中心となりますので、各夫人の略歴を織り交ぜながら、当時の華やかな雛祭りの写真を紹介します。当時の写真の中から今に遺るお雛さまを探し出すのも楽しいでしょう。



鍋島家族一同  
(明治40年撮影)

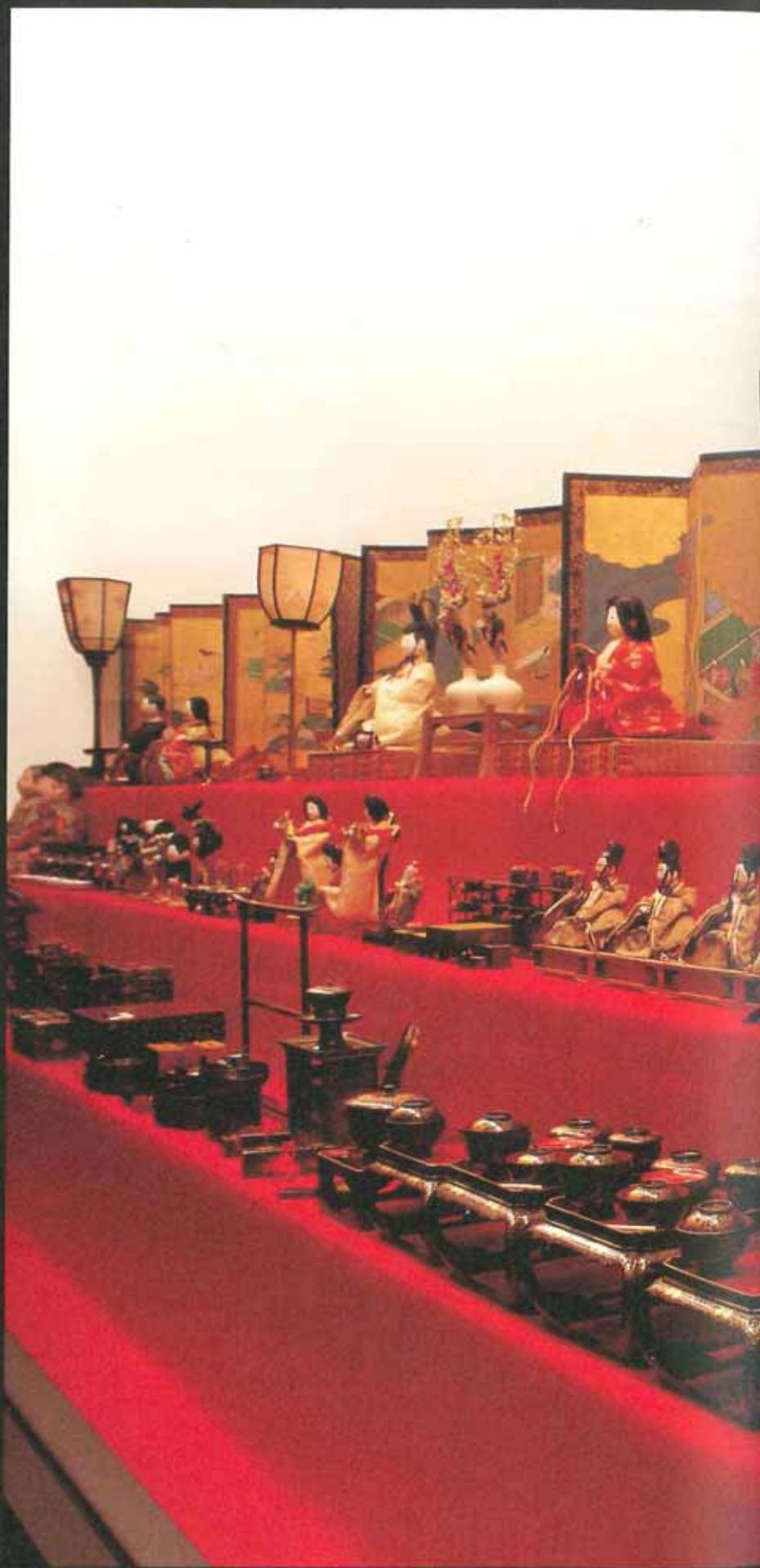
鍋島直大・栄子夫妻(中央)、長男直映・禎子夫妻(前列向かって左)、茂子(前列右端)、(後列左より)直繩、孝三郎、貞次郎、俊子、尚子、中央に座るのは13歳の末子哲雄、枠内は左より前田朗子、梨本宮伊都子、松平信子

# 栄子

梅印

〔十二代直大継室なほひろ〕

栄子さまながこ〕



栄子夫人所用の雛人形・雛道具は明治十四年の結婚後、同二十六年、三十五年、四十年と順々に新調され雛段飾りに加えられていった様子が当時の写真(10―11頁)からもうかがえます。

雛人形は東京日本橋通十軒店の御雛人形師永徳斎の有職雛や

御夫妻お揃いで晩年に新調した二対の次郎左衛門雛

玩もてあそびの御所人形や仕草がかわいらしい毛作り人形など。

雛道具は黒漆地に牡丹唐草の時絵ときゑがほどこされたものが中心となっております。

ワイングラスやコーヒーセットなど、時代を反映した御道具もみられます。

また、深川製磁の梅絵コーヒーカップは佐賀とのかかわりの深さをうかがい知ることができます。

全体的に小ぶりですが、鍋島家伝来の雛道具の中では数量が最も多く、二―三組が一括されています。



5 次郎左衛門雛[じろうざえもんびな] (栄子所用) 男雛 高 32.5 女雛 高 27

### 次郎左衛門雛

団子だんごのような丸頭に引目鉤鼻風の面相を特徴とする次郎左衛門雛は、京都の人形師で幕府御用を勤めていた雛屋次郎左衛門が創始したといわれます。十八世紀後半の江戸で大変にもはやされ、公家および諸大名においては、雛人形の本流として永く重んじられました。

お揃いお揃いのようによく似たこの二対の次郎左衛門雛は十一代直大(松印)と栄子夫人が明治四十年に新調したものです。

この年にはほかにも四躯の御人形を御夫妻で購入しています。直大六十二歳、栄子夫人五十二歳。直大の還暦祝いとして誂あやうえられたものと思われれます。



35-37 懸盤、飯鉢、湯桶 [かけばん、めしばち、ゆとう] 懸盤 奥行 18.5 幅 18.5 高 11.8



38 懸盤、飯鉢、湯桶、柴付小皿 [かけばん、めしばち、ゆとう、そめつけこざら] 懸盤 奥行 14 幅 14 高 11.3



45 赤絵梅コーヒーカップ・ソーサー [あかえうめこーひーかっふ・そーさー] カップ 高 4.7 口径 4.6



有田深川製磁の「富士流水」マーク



46・47 グラス、ガラス徳利 [ぐらす、がらすとくり] グラス 高 5.8 口径 3.6



76 花車曳き人形〔はなぐるまひきにんぎょう〕 高 26

### 御所人形ごしよにんぎょう

御所人形は、頭が大きく体の丸々とした幼児の人形で、木彫や練物ねりものなどで生地こじをつくり、胡粉こたを何度も塗り重ねて磨いて仕上げます。この少し生意気な顔をした花車曳き人形は、明治四十年に直大・栄子夫妻によって新調された八軀の御人形のうちの一つです。

ほかに、着物を着せて遊ぶ裸人形で、腰・膝・足首が折り曲げられ、座れるように工夫された三つ折人形、一風変わったフランコ乗り人形、稚児輪人形などがあります。

# それぞれの時代を映して

## ◆鍋島家のひいなたち

文 小林すみ江（吉徳資料室長・人形史研究）

先ごろ、ご縁を得て鍋島報効会ご所蔵の雛人形を調査させていただく機会に恵まれました。

幕末から昭和初期まで、鍋島家三代の夫人方に愛された品々はいずれも気品と美しさにあふれ、感銘しながら拝見した次第でした。いま、その折の記憶をたどりつつ拙い感想を述べさせていただきます。

顔立ち、あるいは着衣の染料などから推して、江戸期の人形は比較的数少ないかにお見受けしました。しかしながら、安政二年（一八五五）ご生誕の十一代直大夫人栄子様、あるいはそれ以前の伝世品でしょうか、金糸で葵紋を入れ、裾に見事な縫いを施した振袖姿の御所人形は、瞳に玉眼（ガラス）を埋め込んだ点もまことに珍しく、幕末という時代を物語る印象的な逸品でした。

明治以降は、京都の老舗の品や日本橋の有名人形店の品など、いわば上流階級の雛の、東西共存の様相を興深く拝見しました。ことに中期以降は、年毎に買い足される雛のほか、市松人形や愛らしい毛植え細工の動物たちなども加わり、種類も豊富になります。十一代ご当主の還暦祝いに作られたといわれる立派な次郎左衛門雛を例に挙げるまでもなく、そこからは鍋島家の方々のお人形好きはもちろん、雛祭りのにぎわいまでが微笑ましく伝

わってくるようです。それはまた、維新後

の西欧化で一時衰えた雛祭りがまさに復興

するころにも当たり、製作者の腕にも一段と

力のみなぎった、よき時代でした。

なお、宮家ご出身で明治末ご生誕の十三代直泰夫

人紀久子様、初参内の折に聖上から賜ったという通

称「御台人形」も、当時の宮中独特の慣わしをよく伝え、貴重な

ものでした。

また、十二代直映夫人禎子様のご所持品で、従来類例の少な

い極小の銀製雛道具にも眼を奪われました。これぞ職人技の結

晶といえましょうか。

ところが、時代も大正期前後となると、雛道具にもモダンなワ

イングラスやコーヒーセットなどが加わってきます。とかく古典

的と思われがちな雛の世界が、意外に世の流行に敏感なことに

驚かされます。中でも深川製磁製のそれは、ご当地ならではの品

と思えました。

ほかに、細々とした趣味人形もあまた見られ、人形の世界の裾

野の広さを感じるとともに、これらを集められた歴代の夫人方

の優しいお気持ちまでが、しみじみと心に拡がりました。



# 禎子

「十二代直映室なほみつ

禎子ていこさま」

玉印



禎子夫人所用の銀製雑道具二揃はいずれも六〜七cmほどの小さなものですが、細部にわたり非常に精巧に作られています。

一つ一つには異なる装飾文様が線刻され、なかには蓋ふたや引出が開閉できるものもあります。御道具の種類は化粧道具・旅道具・楽器類・文房具類など多岐にわたります。

禎子夫人の生家である黒田家に江戸時代より伝えられたものと思われまます。

類品には陽明文庫蔵や三井文庫蔵その他の銀製雑道具があり

大名家にはあつてしかるべきものだといわれます。



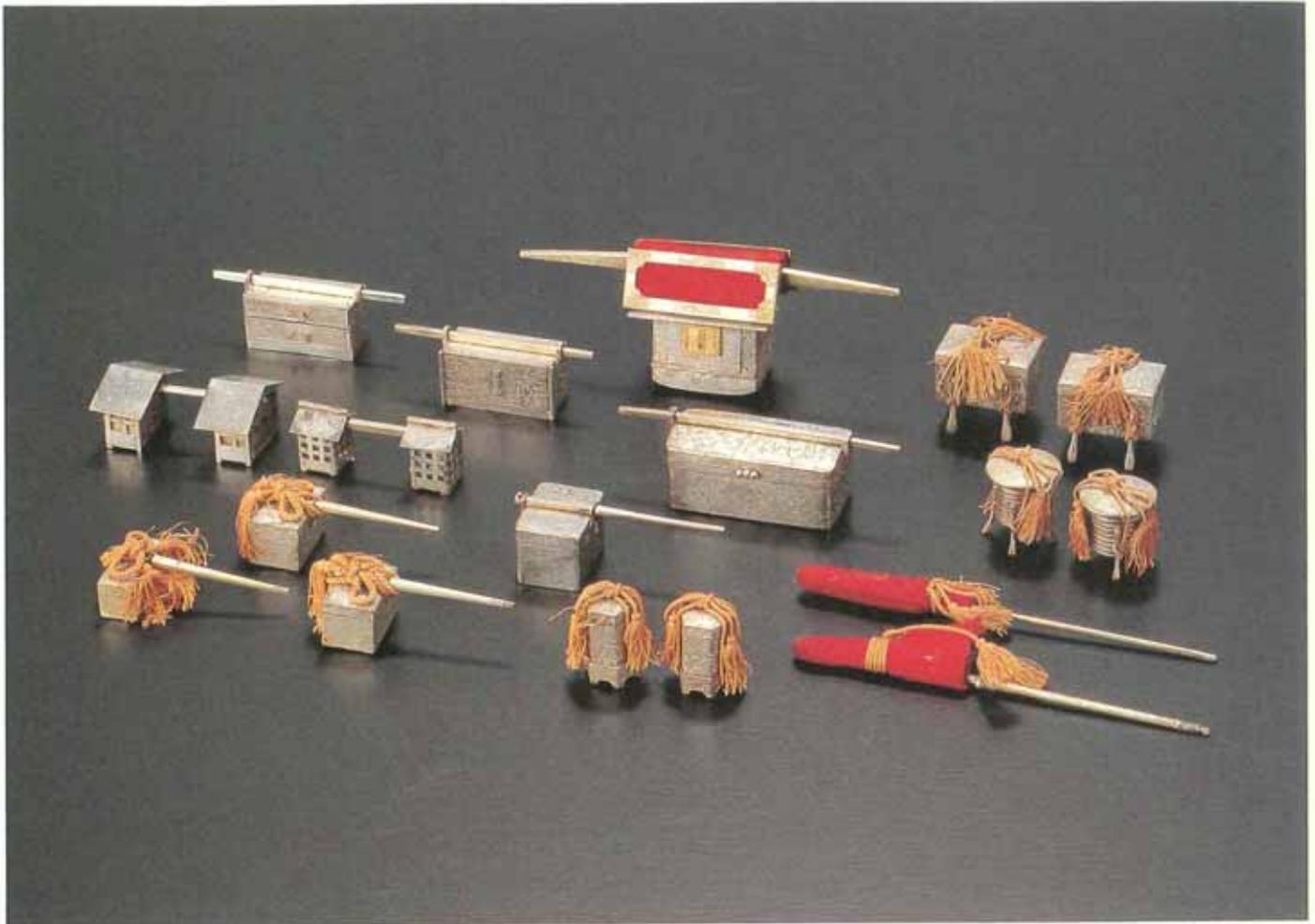
88 茶道具、花見道具、香具〔ちゃどうぐ、はなみどうぐ、こうぐ〕ほか 台子皆具 高 3.9



90 太刀、印籠〔たち、いんろう〕ほか 太刀拵 長 17.5



89 琵琶、三味線、胡弓、笙、太鼓、小鼓、箏  
〔びわ、しゃみせん、こきゅう、しょう、たいこ、こつづみ、そう〕ほか  
三味線 長 4 箏 長 5



93 茶弁当、女乗物、長持、貝桶、唐櫃、行器〔ちゃべんとう、おんなのもの、ながもち、かいおけ、からびつ、ほかい〕ほか 女乗物 高 3.7 貝桶 高 2.2



(原寸大)

# ”嫁いでいった”人形たち

## ◆宇和島伊達家 観姫様のお雛さま

観姫様は佐賀八代藩主鍋島治茂はるしげの女むすめとして、寛政九年（二七九七）二月十三日、佐賀の地で生まれました。仙台伊達家の分家である宇和島七代伊達宗紀むねきとの縁組が決まり、文化十二年（二八一五）秋に江戸へ引越し、十二月二十三日、江戸の藩邸で婚儀が執り行われました。この時の記録「観姫様御日喜越録みよひのこしりやく」に拠りますと、さまざまな婚礼調度の中に

- 一 親王雛老對 代八百八拾目
- 一 古今雛老對 代八百八拾目
- 一 雛入箱四ツ 代八三拾七匁五分
- 一 御雛道具御厨子棚其外 代八老貫三百目  
八拾八品

の記述が見られ、婚礼に先立ち誂あだえられたことが分かりました。江戸での生活の後宇和島に移り、明治三年（二八七〇）十二月十八日死去、七十二歳でした。



古今雛〔こきんびな〕



97 有職雛〔ゆうそくびな〕 男雛 高 41.5 女雛 高 27

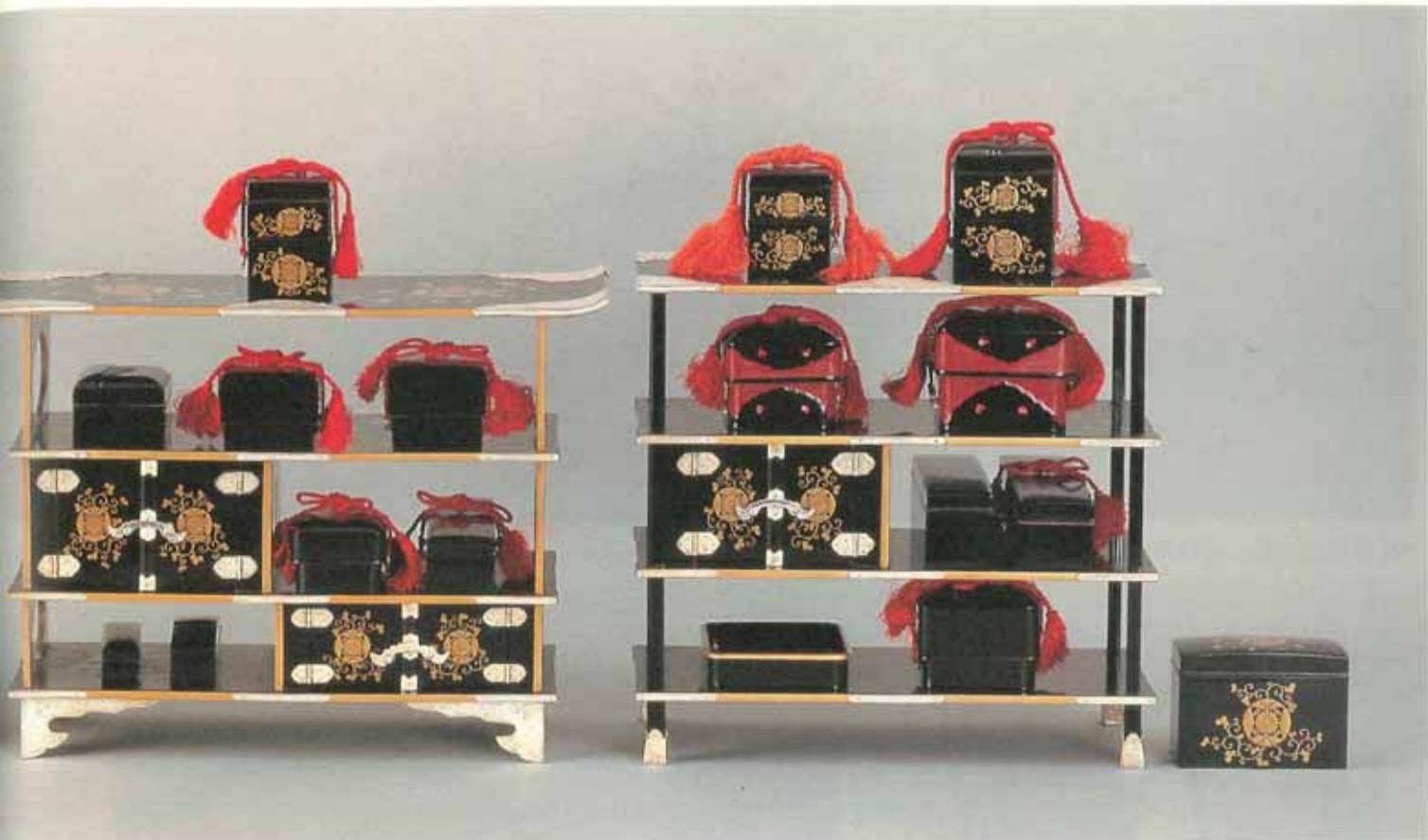
有職雛と犬張子  
ゆうそくびな いぬはりこ

公家の装束を正しく考証した雛人形を有職雛といいます。この内裏雛は公服である衣冠束帯いせきそくたを身につけた東帯姿です。

犬張子は犬を型取った置物で、犬宮いぬみやともいわれます。男犬、女犬を一对とし、幼児の無事息災を祈るためにその枕元に置かれ、また婚礼の際にも飾られました。



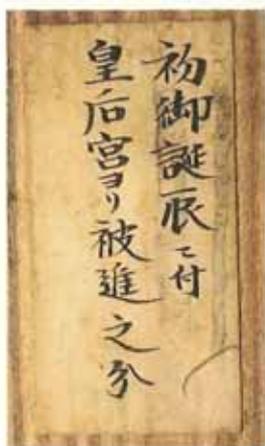
98 犬張子〔いぬはりこ〕 高 8.5



112 本箱、机、見台【ほんばこ、つくえ、けんたい】 本箱 奥行 6.1 幅 4.5 高 12.7



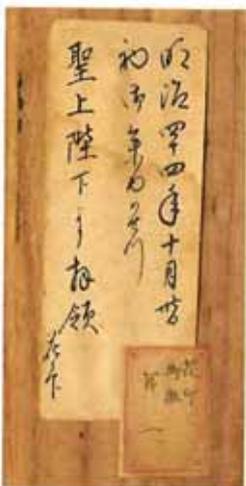
127 山姥[やまんば] 奥行 42.6 幅 63.4 高 40.5



箱書  
 「徳印／御雛／第七號」  
 「初御誕辰ニ付／皇后宮ヨリ被進之分」



128 鶴亀松竹菊庭雛鶏遊御人形〔つるかめしょうちくきくにわひなどりあそびおにんぎょう〕 奥行 44.6 幅 63.2 高 58.2



箱書  
 「明治四十四年十月廿日／初御参内のせつ  
 ／聖上陛下より拝領／花印」

# 御台人形について

御台人形おだいじんぎょうは草花や動物などを台に取り付けて配した大型の御所人形で、明治以降その名称が用いられています。皇族の子女が宮中において折々に天皇・皇后両陛下から拝領されるもので、その題材は謡曲うたいきょくに取材したものや吉祥の意味を含んだものがあります。

鍋島家には明治天皇の孫にあたる紀久子夫人所用の御台人形四組が伝来しますが、紀久子夫人降嫁こうかの翌年、昭和七年の写真(12頁)にはさらに二、三組の御台人形が雛段に飾られていた様子がうかがえます。

「山姥やまばあ」(図版127)は、紀久子夫人の母、朝香宮允子妃(明治天皇の第八皇女富美宮、徳印)が明治二十五年に誕生祝いとして皇后より拝領したもので、熊と戯れる金時きんときとその母山姥の人形をあらわしています。

「鶴亀松竹菊庭雛遊御人形」(図版128)は、明治四十四年十月三十日、紀久子夫人初参内の折に明治天皇より拝領した吉祥尽しの御台人形です。そして翌年の明治四十五年三月、初節句の折に天皇・皇后両陛下より拝領したものが「花車引人形」(図版129)です。なお、同じく初節句の折には毛利安子(周防山口毛利元徳夫人、一八四三—一九二五)により大小二つの御台人形が献上されましたが、その内の二つが「鯛曳き御台人形」(図版130)です。



# 所藏品目録

## 凡例

一、鍋島家の雛人形・雛道具は、所有者の世代順を基本とし、所有者不明分は最後にまとめて掲載しました。

二、男雛、女雛の並べ方には諸説ありますが、鍋島家の雛人形は明治以降のものが中心となっていることから、当時（明治三十八年・四十二年・昭和七年）の雛飾り風景の写真に基づき、本図録では男雛を向かって左、女雛を右に配しました。

三、目録には、番号、名称、員数、寸法（単位cm）、備考の順に掲載しました。備考には箱書の主要なものを記しました。なお、不明の箇所は□で表しています。

四、本図録に掲載されていない作品も、通し番号を付さずに列記しました。

五、本図録は藤口悦子、佐藤朋子が編集、執筆しました。

### 1 左大臣

高31  
箱書「糞印／左大臣人形入」〔六拾四ノ二〕

1 軀

### 2 右大臣

高31  
箱書「糞印／右大臣人形入」

1 軀

### 3 葵御紋付御所人形

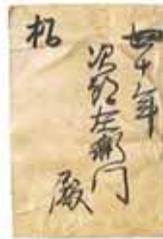
高17.7

1 軀

### 4 次郎左衛門雛

高33 (男雛) 高24.8 (女雛)  
男雛箱書「四十年／次郎左衛門／殿／松」〔八個ノ内／侯爵鍋島〕背面に紙縫墨書「松印／次郎」

1 対



### 5 次郎左衛門雛

高32.5 (男雛) 高27 (女雛)  
男雛箱書「□年／次郎左衛門／男／梅」〔八個ノ内／侯爵鍋島〕背面に紙縫墨書「梅印／次郎左衛門」

1 対

### 6 有職雛(直衣姿)

高30 (男雛) 高23 (女雛)  
箱書「東京日本橋通十軒店／御用 御雛人形司／京都 永徳齋」〔梅印／御雛入〕

1 対



### 雛台

奥行29.6 幅41.5 高5.9  
箱書「梅印／御直衣雛／御坐多々々 二／明治三十五年新調」

1 対

### 7 隨身

高13  
箱書「廿六年二月御用／梅印／矢大臣／左大臣」

1 対

### 8 三人官女

高13.9 幅22.3  
箱書「梅印／官女三人揃／明治三十五年新調」〔京都 桑通堺町北東角／御雛人形細工司／丸屋／大木平蔵〕

1 組

### 9 五人囃子(雅楽)

高約13  
箱書「雅楽ノ五人様の内」〔東光斎／玉翁〕

1 組

### 10 屏風

〔左隻〕 縦54.4 横124.9  
箱書「播町堂了め／富吉」

1 双

### 11 屏風

〔左隻〕 縦52.9 横140  
落款「源恒之畫」

1 双

### 12 屏風

〔左隻〕 縦48.5 横132  
第6扇裏に墨書「2 yen」

1 双

### 13-1 厨子棚飾り

奥行6.6 幅18.2 高15

1 具

### 13-2 黒棚飾り

奥行6.3 幅15 高13.7

1 具

### 13-3 書棚飾り

奥行6.7 幅15.7 高5.1  
箱書「本消牡丹唐草三棚」〔梅印／三棚／三〇六〇品入〕

1 具

# 鍋島家の雛あそび

発行日

平成十四年二月吉日

発行

財団法人 鍋島報効会

佐賀市松原二一五―二十二

TEL.FAX 0952(23) 4200

撮影

久我秀樹

デザイン

マツダヒロチカデザイン事務所

編集

FUKUOKA STYLE 編集部

印刷

福博総合印刷株式会社

本図録からの無断転載を禁じます  
財団法人 鍋島報効会 ©二〇〇二

